

# 地球時代と平和への思想

堀尾輝久 著

## 旧システムからの転換呼びかけ

世界中が雪崩を打つように、おかしな方向に動いている。核による共滅の危機、気候大変動、感染症などのリアルな地球的問題群に立ち向かうことこそが今日の人類にとって喫緊の課題であるのに、いま政治は本来の役目を忘れ、乏しい資源を軍事へと投じ、愚かな戦争とその

準備に狂奔している。こうした状況に対し、正気を取り戻せと警鐘を鳴らす声が各処から上がっている中で、とくに本書を推薦するには理由がある。まず文章が論理明快、じつに読みやすい。また、単なる主観や希望的観測の表明ではなく、卒寿を迎えた著者の長年の学問



本の泉社・3200円

ほりお・てるひさ  
33年生まれ。東京大学  
名誉教授。日本教育学  
会会長など歴任。『人  
権としての教育』

的蓄積に支えられた叙述であることへの、信頼感も大きい。本書に収められた三十点近くの論稿が書かれた時期は冷戦終結の頃から現代にわたるが、それらは人間の成長に関わる教育学を専門とする著者らしく、過去から未来に向かう時間軸の中で自らの視点を定めようとする姿勢で一貫しており、ブレがない。またまった短い文章のどれから読み始めても、得られるものがあるのだ。

戦争と軍隊が所与のものとして組み込まれていた国家中心の旧システムから「地球時代」へと、世界的な転換が始まっております。それによさわしい思想を自らのものにして、著者は呼びかける。平和立国をめざした戦後の日本人の歩みが、その展望の中で再認識され、平和憲法、民主主義、核兵器廃絶といった言葉に、生命がよみがえります。

歴史と道理をわきまえない現実政治に対する著者の憤りは、例えば善未近くの「安保法制違憲訴訟における陳述書」で痛烈に吐露されている。SEALDsへの連帯のシュプレヒコールや、「地球平和憲章」の歌といった人間的な発声を含め、軍国日本を経験した著者の国際的活動と「平和・人権・共生」の渾身のメッセージは、間違いない。今を生きる私たちが導きとすべき指針と言えよう。

評者 高原孝生 明治学院大学国際平和研究所前所長

2023. 4. 16 発行